

有島武郎作 小さき者へ

お前達が大きくなって、一人前の人間に育ち上がった時、その時までお前たちのパパは生きていないか分からないことだが父の書き残したものを繰返して見る機会があるだろうと思ふ。その時この小さな一文もお前たちの目の前に現れ出るだろう。

お前たちは遠慮なく私を踏台にして高い遠い所に私を乗越えて進まなければ間違っているのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にいるか、或いはいたかといふ事実は永久にお前たちに必要なものだと思ふのだ。お前たちがこの一文を読んで、私の思想の未熟で頑固なのを嗤う間にも、私の愛はお前たちを暖め、慰め、励まし、人生の可能性をお前たちの心に味覚せずにおかないと思っている。だからこの一文を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人のたった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生まれると間もなく、生命に一番大事な養分を奪われてしまった。お前たちの人生はそこで既に暗い。お前たちは不幸だ。快復の途なく不幸だ。不幸な者たちよ。

暁方の三時からゆるい陣痛が起こり出して不安が家中に広がっ

石原 広子

石原広子朗読の会)

父から息子たちに呼びかける手紙として読んでみたい。手紙の読み方には手法がある。

父になりきって息子達に話しかける方法と、朗読者が息子たち(手紙を受け取る方)になって父(手紙を書いている方)からの声を聴く立場で聞こえてくる声を音にするという方法である。

どちらかと言えば後者をとりたい。この文章は遺言のような雰囲気もある愛をこめて読み進めたい。

父は知的でエリートである。

転調。当時を思い起こしながら。

たのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら滅多にはない吹雪の日だった。市外を離れた川添ひの一つ家はけし飛ば程揺れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉じこめられた陽の光を二重に遮って、夜の闇さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。産婆が雪で真白になってこるげこんで来た時は、家中のものが思はずほつと息気をついて安堵したが、昼になつても昼過ぎになつても、出産の模様が見えなくて、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える気遣ひの色が見え出すと私は全く慌てしまつていた。昼過ぎになると戸外の吹雪は段々鎮まつていつて、濃い雪雲を漏れる薄日の光が、窓にたまつた雪に来てそつと戯れるまでになつた。然し産室の中の人々にはますます重い不安の雲が蔽い重なつた。医師は医師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕らわれてしまつた。その中で何等の危急をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでいる産婦と胎児だけだった。二つの生命は昏々として死の方に眠つていった。丁度三時と思はしい時に産気がついてから十二時間目に、夕を催す光の中で、最後と思はしい激しい陣痛が起こつた。肉の眼で恐ろしい夢でも見るように、産婦はか

雪の情景を想起して下さい。

描写をしつかりと。

主人公の心の動揺を察して下さい。

安堵感が少し漂う。

然して転調。

文章にリズムが出ている。

夫と父親の愛情が感じられる。

少しづつテンポを早めて読んでいく。

つと瞼を開いて、あてどなく一所を睨みながら、苦しげというより、恐ろしげに顔をゆがめた。医師と産婆は場所も忘れたように大きな声で産婦を励ました。ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顔を挙げて見た。産婆の膝許に血の気のない嬰兒が仰向けに横へられていた。お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このようにして世の光を見た。二番口も三番目も、生まれように難易の差こそあれ、父と母に與へた不思議な印象に变りはない。(中略)

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が来た。每晚お前たち三人を自分の枕許や、左右に寝かして、夜通し一人を寝かしたりして、一人に牛乳を温めてあてがったり、一人に小用をさせたりして、碌々熟眠する暇もなく愛の限りを蓋したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に来てくれた二人の医師が口を揃えて、結核の微候があるといった時には、私は唯譯もなく青くなつた。而して四つと三つと二つになるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ体となつてしまった。(中略)

北国には冬が見る見る逼つて来た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寝台の上に起きかへつて窓の外を眺めていたが、私の

不安と安堵と幸福感が交錯している。

冷静を取り戻した主人公の心が見える。

転調。

又、不安がうねりのようにやってくる。

結核は当時死病であった。

大きな不安と喪失感をこめて。

転調。

夫の妻への愛情が感じられる箇所。

顔を見ると早く退院がしたいといひ出した。窓の外の楓があんなになつたのを見ると心細いといふのだ。成るほど入院したてには燃えるように枝を飾っていた葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて萎れる前に萎れていた。私はこの淋しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本統の心持ちはそんな所にはなくつて、お前たちから一刻も離れていられなくなっていたのだ。知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつていたのだ。五人の親子はどんどん押し寄せて来る寒さの前に、小さく固まつて身を護ろうとする雑草の株のやうに、互いにより添つて暖みを分かち合はうとしていたのだ。然し北国の寒さは、私たち四人の暖みでは間に合わない程寒かつた。私は一人の病人と頑是ないお前たちとを労りながら旅雁のように南を指して遁れなければならなくなつた。それは初雪のどどん降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上がったのは。忘れる事の出来ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名残を惜んだ。陰鬱な津軽海峡の海の色も後ろになつた。東京までついて来てくれた一人の學生は、お前たちの中の一歩小さい者を、母のように昼夜抱き通していてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸

家族としての一体感を感じて

良い人間の良い考え方を素直に力強く表現して下さい

それはで転調して下さい

學生に対する感情の念が伝えられる。

いに怪我もなく、二日の物憂い旅の後に晩秋の東京に着いた。(中略)

正月早々悲劇の絶頂が到来した。お前たちの母上は自分の病気の真相を明かされねばならぬ羽目になった。そのむづかしい役目を勤めてくれた医師が帰って後の、お前たちの母上の顔を見た私の記憶は一生涯私を駆り立てるだろう。眞蒼な清々しい顔をして枕についたまま母上には冷たい覚悟を微笑に云はして静かに私を見た。そこには死に封する「es. gratioso」と共にお前たちに封する根強い執着がまざまざと刻まれていた。それは物凄くさへあった。私は凄惨な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまった。愈々H海岸の病院に入院する日が来た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢わない覚悟の臍を堅めていた。二度とは着ないと思はれる。而して實際着なかつた晴れ着を着て座を立った母上は内外の母親の前でさめざめと泣き崩れた。女ながらに気象の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけいる場合でも泣顔などは見せた事がないといつてもいい位だったのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙はお前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまった。大空を亘る雲の一片となっているか、谷河の水の一滴となっているか、大洋の泡の一つとなっているか、又は思ひがけない人の涙堂に貯えられて

転調。

母を知らない子どもたちに、母の美しさを正確に伝えようとする父の愛情が感じられ、同時にそれは妻への愛とも受け取れるので二つの愛を表現してほしいです。

母を語っていくうちに妻を語っていく。

決して感情的に読まないことが大切です。

ただ情景の描写をひたすら客観的に読み描くこと。

子ども達に誇りを教えている父親を感じます。

いるかそれは知らない。然しその熱い涙は兎もお前たちだけの尊い所有物なのだ。(中略)

お前たちが六つと五つと四つになった年の八月の二日に死が殺到した。死が凡てを圧倒した。而して死が凡てを救った。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに與へられた一節だった。母上は血の涙を泣きながら死んでもお前たちに遭わない決心を翻さなかった。それは病菌をおまえたちに傳へるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの延び延びて行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。(中略)

深夜の沈黙は私を厳肅にする。私の前には机を隔ててお前たちの母上が座っているようにさへ思う。その母上の愛は遺言にあるようにお前たちを護らずにはいないだろう。よく眠れ。不可思議な時の作用にお前たちを打ち任してよく眠れ。そして明日は昨日よりもより賢くなくて寢床の中から跳り出して来い。私は私の役目をなし遂げずにはおかない。私の一生が如何に失敗であろうとも、又私が如何なる誘

母の崇高な姿を正確に子ども達に伝えようとする父親の聲が聞こえるように、その声を声に出そうと工夫して下さい。

転調。

限りなく溢れるような親の愛をこめて、子どもを信じている父の聲。

惑に打負けようとも、お前たちは私の足跡に不純な何者をも見出し得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは私のたおれた所から新しく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは私がお前たちに示す積もりだ。小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前たちに示す積もりだ。小さき者よ。不幸に而して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。

(一九一七・一二・八)

子ども達の保護者としての父の責任ある力強い声。

リズムがあります。小さき者よと呼びかけて

少したつような感じになっても終局なのでよい。

最後は上げてても下げててもテンションは言葉の中にしっかりと込めて下さい。

最後にもつ一度父と母の心をこめて呼びかけて。声は大きくても小さくても心のこめ方で締まると思います。